

駄菓子屋 ー子供の社会ー



このお店は、お菓子やおもちゃ、有名人の写真や人気のキャラクターが描いてあるカードなどを売っています。駄菓子屋と言います。午後2時ごろに開きます。そして、午後5時ごろに閉まります。営業時間は毎日同じではなくて、ときどき変わります。他のお店に比べて、お店が開く時間が少し遅いです。これは、小学生が家に帰る時間に合わせているからです。このお店のおじいさんは、70年間駄菓子屋を続けているそうです。ひ孫もお菓子を買いに来ると言っていました。ひ孫は、孫の子どもです。



昔は、どこの町にも駄菓子屋が何軒もあって、子どもたちでにぎわっていました。それが1980年代からどんどん減っていきました。1980年代と比べると、今では、約7割のお店がなくなりました。子どもの数が減り、子どもが好きなお菓子やおもちゃの種類が変わったからです。そして、コンビニが増えました。コンビニは、駄菓子屋よりお店がきれいです。また、駄菓子屋と同じぐらいいろいろな種類のお菓子を売っています。それで、古いお店のまま、昔からあるお菓子を売る駄菓子屋は人気がなくなってしまいました。

私が子どものとき、家の近くに駄菓子屋がありました。友だちや妹と一緒に、子どもだけでよくお菓子を買に行きました。自分のおこづかいで買うので、どのお菓子を買うか、一生懸命選びました。駄菓子屋のお菓子は一つ10円ぐらいから買えるので、100円あったらたくさんのお菓子を買えます。子どものときの私にとって、駄菓子屋は夢の世界でした。お金が足りないといけないので、買う前に、何度もお金の計算をしました。お菓子を選んでいる間、お店のおばあさんとお菓子や学校のことについて話しました。お店で友だちに会うと、一緒にお菓子を食べたり、お菓子やカードを交換したりしました。



子どものときの私は、駄菓子屋で、お金を計算したり、友だちに会ったり、お店のおばあさんと話したりしていました。つまり、昔の子どもは、駄菓子屋でお金の使い方や大人との会話を学んでいたのです。駄菓子屋が少なくなって、今の子どもはそんなことができなくなってしまったかもしれません。スーパーやコンビニはとてもきれいですが、お店の人とゆっくり話すことができません。そして、スーパーやコンビニはたくさんあるので、偶然友だちに会う機会も少ないでしょう。駄菓子屋は、子どもにとって小さな社会だったのかもしれない。

おじいさんは、「赤ちゃんからお年寄りまでみんなこの店に来る。昔は、1日に10万円から20万円ぐらい売れる時もあったが、今は10分の1に減った。他の駄菓子屋はみんな、お店を閉めてしまった。でも、ボケないようにこれからも頑張る。死ぬまで続ける。」と話していました。

(1110字)

(2021.10 Written by Wakiko FUTAKUCHI)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.